HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	”軽度”発達障害を持つ子どもたちの支援 その5 ： 土曜教室の経験を現場で生かす
Author(s)	長谷川, 眞優
Citation	子ども発達臨床研究, 2, 57-60
Issue Date	2008-03-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32450
Type	departmental bulletin paper
File Information	HASEGAWA.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

“軽度”発達障害を持つ子どもたちの支援　その5

土曜教室の経験を現場で生かす

長谷川　眞　優*

My experiences in Saturday Class and their practical use to an educational field

Mayu HASEGAWA

要　旨

筆者が大学、大学院在学中に関わった北大土曜教室を振り返り、そこで学んだ実践が現在の特別支援学校の現場においてどのように生かされているかを考察した。特別支援教育は、子どもたちの将来を見据えながら教育をする視点を持つ。土曜教室での経験から筆者は、個を見ること・全体を見ることの大切さ、教育や指導の見直しをすることの大切さ、見通し・目標を持つことの大切さ、事前準備の大切さ、連絡・相談することの大切さを知り、現場で実践している。土曜教室は、子どもたちの支援の場という意味合いだけではなく、学生自身も成長できる場である。

キーワード：北大土曜教室、特別支援教育、現場での実践

筆者は、2007年度より横浜市で特別支援学校の教員をしている。本小論では、筆者が大学3年生から大学院修士2年生まで、北大土曜教室のスタッフとして活動し、そこで学んだことについてまとめ、土曜教室での実践が現場においてどのように役立てることができるかを考察した。

1．土曜教室で学んだこと

筆者は、土曜教室において高次脳機能障害の女児を担当し、学習支援を行った（長谷川、澤木、寺尾、室橋、2006；Terao, Sawaki, Hasegawa, & Murohashi, 2005）。また、ティーチングアシスタント（TA）として土曜教室に参画した。筆者は、土曜教室での実践を通して、「支援の本質」を考える手がかりを得た。例えば、問題が解けない時、すぐに答えを提示することは、必ずしも彼女の成長へと結びつくとは限らない。「なぜつまずいたのだろうか？」「どのような方法であればうまくいくのであろうか？」について、彼女の特性を踏まえ、保護者からのアドバイスやエピソードを聞き、スタッフ皆で考え実践することが求められることがわかった。また、彼女との出会いをきっかけに、高次脳機能障害に関する書籍や文献を読んだり、

*横浜市立本郷特別支援学校　教諭

疑問に思ったことを調べたりして知識を増やした。わずかな時間だが、〝今自分ができること〟を精一杯行ないながら、彼女と向き合った。彼女との出会いは、１つのことに夢中になって取り組むきっかけを与えてくれた。無駄にみえたかもしれない勉強の中から、研究テーマも見つけることができた（長谷川、室橋、2005）。

土曜教室全体を見ながら活動する TA の仕事では、スタッフとして関与していては気づかなかった点があった。TA は見通しを持ち、次に行なうことを考えながら、スタッフがスムーズに動くことのできる環境を設定する必要がある。また、事前準備などを通してスタッフで話し合い、皆で協力しながら作り上げることで、全員が参加している、という一体感の重要性を痛感した。また、スタッフの人たちと気軽に相談したり意見を言える雰囲気も大切である。日ごろから、たあいのない話をすることで生まれる信頼関係が、土曜教室の活動を支えていたと考える。先輩・後輩に関係なく、気づいた人たちがそっと声をかけてくれたり、自然に手を貸してくれるなど、スタッフの細やかな配慮が集まって土曜教室が成り立っている。皆が頑張って準備するほど、子どもたちの笑顔も生まれ、信頼関係も深まるのである。土曜教室は、子どもたちの支援の場という意味合いだけではなく、学生自身も成長できる場であることを教育現場に出て改めて感じている。

２．現場で生きている土曜教室の経験

2007 年 4 月から、特別支援学校の教員として社会人の一歩を踏み出した。学生の時に土曜教室で学んだ経験は、今の学校現場でも大いに役立っていると感じる。多忙な日々に流されそうになる時、目標を見失いそうになる時、学生と社会人との違いに頭悩ませる時、失敗して落ち込む時、土曜教室での活動を思い出しながら、今の自分にできることを精一杯行なっている。

⑴　個を見ること・全体を見ることの大切さ

筆者は、土曜教室では担当の女児を中心に、また TA の経験から、活動全体を見ることで新たな発見が多かった。教育現場においても、個を見ることと全体を見ること、両方の視点をもって活動している。子どもたちとの信頼関係を深めることももちろん大切であるが、全体を見渡した時に気づくこともある。学校現場では、「活動に参加できず困っている人いないか？」「次の準備はできているか？」「次に何を伝えればよいか？」など、担当児だけに声をかけるのではなく、全ての子どもの動きを見ながら必要な支援をしていくことが望まれる。この視点は、土曜教室で培われた経験に基づいており、筆者はこの視点を大切にしながら実践をしている。

⑵　教育や指導の見直しをすることの大切さ

土曜教室の活動を通して、学校現場では、「なぜつまずいたのか？」「どのような支援を工夫すればよいのか？」ということを考えている。子どもが障害だから〝できない〟というだけではない。学校現場で子どもたちのつまずきを見るたびに、「なぜつまずいたのか？」あらゆる可能性について考えるようになった。

例えば、場の状況が把握できず混乱したり不安になったりする生徒がいた時、「自閉症だから」「見通しをもてなかったから」という見方ではなく、また、その場でパニックを静止させるというやり方ではなく、生徒にとってより必要なことを考え、その後のフォローに配慮すべきである。教員が「困った時には先生に伝えてね」とパニックになった時の対処法を教えてあげたり、混乱しないための方法を提示したりすることが必要であろう。また、その時の環境はどうだったのか、まわりの教員と相談することも必要なことである。

⑶　「子どもたちに何を学んでほしいのか」見通し・目標を持つことの大切さ

日々の業務に忙殺される中で、子どもに何を学んでほしいのかを考えながら教材を作ったり、言

葉がけをすることは基本的なことであり、また大切なことである。例えば、現在学校で担当している生徒の着替えの指導では、「一人で着替えることができる」のが最終目標だが、そのためには何を学ぶことが必要か、生徒と一緒に考えたり、生徒への声かけに配慮しながら支援している。更衣室に一人で行けること、服の前後に気づくこと、何のために着替えるのか知ることなどたくさんある。毎日の積み重ねで少しずつできるようになってくる喜びを共有しながら、生徒のペースに合わせて目標を考え、スモールステップで取り組む実践を行っている。

⑷ 事前準備の大切さ

授業の中で、生徒に何を学ばせたいのか、という授業の目的を持つことは重要である。授業の目標を達成するために、事前準備は重要であり、それをしっかりするだけで、生徒の授業態度や活動に違いがある。

例えば、事前に準備した具体物を提示したり、生徒の目の前で例を見せながら解説していくのと、口頭で説明するだけでは、生徒の目の輝きが違う場面があった。授業の導入部分で興味・関心をひきつけられると、「自分たちでもできるんだ」「何か楽しいことがはじまるんだ」と身を乗り出して聞いている生徒もいた。できることが増えたり、楽しいと思える授業ができれば、次への期待にもつながる。生徒たちの興味・関心の視野も広がり、筆者も教材の提示の仕方や言葉がけから生まれるリアクションの違いから新たに気づかされることがある。土曜教室でも、スタッフで教材を研究したり、よい言葉がけを考えたりしていたが、その活動が今にもつながっている。

⑸ 連絡・相談することの大切さ

子どもの声、親の声、スタッフ同士の声を聞くことは、それぞれ重要な意味を持ち大切なことである。子どもの声を聞くことは、信頼関係を築くだけではなく、〝現在の子どもたち〟を知ることができ、支援者も楽しんで関わることができる。例えば、子どもたちが好きなキャラクターや関心ごと、好みなどを知ることで、支援する側もアニメのキャラクターを勉強し、次の日に話に取り入れると生徒はとても喜んで話をしてくれる。また、お気に入りのキャラクターを授業に取り入れることで、生徒の興味・関心を増やすことができた。

土曜教室では、親の声を聞くことの大切さを数多く経験した。学校現場では「何かあったらいつでも連絡をしてくださいね」とお話したり、学校生活で気になったことは連絡ノートや電話で連絡をするようにしている。学校でできたこと、喜んでいたことは少しでも多く伝え、「安心してわが子を任せることができる」と信頼してもらうことは大切だと感じる。特に今年から教員になった筆者は、親の不安を軽減するためにも、コミュニケーションを取ることはとても大切であると実感する。

スタッフ同士で話をすることの大切さも土曜教室で学ぶことができたものだが、教員になっても同様である。不明な箇所は周囲の教員に聞いたり、生徒のことについて一人で悩まず相談したりすることで、連携して教育を行っている。廊下や教室に行くまでのわずかな時間でも、自ら積極的に関わっていくことで職場間の意思伝達や信頼関係を維持するよう努めている。

3．特別支援教育にかかわる教員として

特別支援教育は、子どもたちの将来を見据えながら教育をする視点を常に持っている。子どもたちの周囲の環境を完璧に整え、困った時は全てサポートすることだけでは、彼らにとって必ずしもためになることではない。大人の手から離れた時に、一人でできることが少しでも多くあること、困った時に自分で考えたり、まわりに協力を求めることができるか、ということの方が、彼らの人生にとって重要であると思う。大人は、ただ「かわいい」と思いながら接すだけでは本当の支援にはならないのだということに、改めて気づかされる。毎日学校に来て勉強する積み重ねは本当に大

きい、とその責務を感じる日々である。

筆者は、今後も個性あふれる生徒たちと一緒に活動していくことになる。これからも、新しいことにチャレンジして、いろいろなことを吸収していきたい。子どもの視点・大人の視点を大切にしながら、失敗を重ねながら、明るく楽しく活動していこうと思う。そして、自分のペースを大切にしながら、一生子どもたちと共に学び続けていきたい。

文献

長谷川真優，室橋春光（2005）展望的記憶における生理心理学的アプローチ，日本心理学会第 69 回大会．

長谷川眞優，澤木梨沙，寺尾敦，室橋春光（2006）幼児期に交通外傷を受けた中学生への数学指導，北海道 LD サポート学会研究紀要第 5 号，74–81．

Terao, A., Sawaki, R., Hasegawa, M. and Murohashi, H. (2005) Improving Skills of Addition and Subtraction Involving Negative Numbers Based on Cognitive Task Analysis and Assessment of Mental Representations of Negative Numbers: A Case Study of a Seventh-Grade Student. *Proceedings of the Twenty-Seventh Annual Conference of the Cognitive Science Society*.

寺尾敦，澤木梨沙，長谷川眞優，室橋春光（2005）正の数・負の数の加法・減法の計算方略，日本心理学会第 69 回大会．